

◇夢中になって読んだ

『発達保障への道』第一分冊が刊行されたのは、第八回全国大会（一九七四年）である。教師になって三年、埼玉の障害者運動や全障研活動にも深くかかわるようになり、次の大会準備事務局長として大会前から岡山入りしていた。『発達保障への道』を購入し、帰りの車中で一心不乱に読んだことを思い出す。

◇以前の障害者問題を解くヒントが

一九七四年は、東京都で希望する障害児の全員入学が実現した年であり、前年の一九七三年、文部省は一九七九年度より養護学校義務制を実施すると予告政令を出している。障害児の教育権保障の運動は全国で盛り上がり、埼玉でも親の切実な訴えと涙が県当局を動かし、「障害の重い子を切り捨てない」養護学校建設が始まっていた。「障害を宣告され、その後はどこをどう歩いたかわからない。気づいたら線路に立っていました」「なぜ障害が重いと就学免除なんですか。障害があるからこそ、

学校教育が必要です」こうした障害者・家族のねがいや思いに触れ、日々心揺さぶられていた。教師としての生き方を模索していた私は、体験を整理し、深めたかった。そんな私にとって、待ちに待った最適の書が本書であった。

なぜ障害児の教育権が奪われ、「発達侵害の道」がつくられるのか、なぜ障害者が社会の厄介者として差別されるのか、その元凶は何で、どのようなしくみですめられるのか、実践や運動のなかで感じ考えてきた課題を解明するヒントがたくさん書かれていた。私もそうであったが、これを読んだ多くの読者は、田中氏の分析が自分のためになされたと思ったのではないか。

◇社会進歩への科学的な見通し

本書で、田中氏は、①社会進歩にたいする科学的な見通しを持ち、②集団のなかに差別を許さない民主主義を実現し、③人格の解放と結合した能力の発達を実現していく発達の科学を建設するという三つの課題を提起し、つづけて「障害者・国民の団結の力を社会進歩の運動のなかでいっそう強大にさせ、それを阻むものを明確にしたたかい、粘り強く前進していかねばならない」と述べている。この課題提起は、七〇年代前半の情勢にもとづいてなされているが、現代の私たちにとっても重要である。社会保障・社会福祉が抜本的に改悪されるとともに、「戦争のできる国づくり」をめざし、憲法や教育基本法の改悪が目論まれている今、障害者の権利保障や発達保障をすすめる必要ならば、この課題、とりわけ社会進歩にたいする科学的な見通しを持つことを真っ正面にすすめる必要があると

思うからだ。

そのほか、語れば切りがないほど、多くを考えさせられ学ぶことのできる書である。学びつつ、今の時代にふさわしい新版「発達保障への道」を集団的につくることがかせられていると思う。これは田中氏から私たちに出された重い宿題である。

二〇〇六年七月

第四〇回全国大会（奈良）を前に

全国障害者問題研究会全国委員長

品川文雄